

## 豚の敗血症における腎臓病変の比較検討

○下司 高弘、岡地 潔、松田 克也、山内 俊平、細井 美博

### 豊橋市食肉衛検

はじめに と畜検査でみられる豚の敗血症の所見は、急性期とは異なり疣贅性心内膜炎や腎臓の間質性腎炎等の慢性病変を認める場合が多い。今回、我々は豚の敗血症における腎臓病変に着目し、病理学的検索を行った。さらに病原菌を分離し、腎臓病変との関連性について比較検討したので概要を報告する。

材料および方法 2012年6月22日から2013年3月29日までに管内と畜場に搬入された豚169,353頭のうち、敗血症（豚丹毒心内膜炎型を含む）と判定した92頭(0.05%)を調査対象とした。

1. 腎臓の病理学的検索：肉眼で精査後、10%中性緩衝ホルマリン液で固定し、定法に従いパラフィン切片を作製し、病理組織学的検索を行った。2. 疣贅物及び腎臓の細菌学的検索：心臓に形成された疣贅物及び腎臓について、捺印塗抹検査後、好気培養は5%馬脱繊維血液加トリプトソーヤ寒天培地に、嫌気培養は変法 GAM 寒天培地にそれぞれ接種し、37℃で48時間培養した。また、豚丹毒を疑った場合は、アザイド寒天培地も併用し分離培養した。分離菌はAPI Staph、API 20 Strep、API Coryne、API 20 A(以上シスメックス・ピオメリユー)及びIDテスト・EB-20(日水製薬)を用いて同定した。

結 果 1. 敗血症と判定した豚の全てで疣贅性心内膜炎を認めた。疣贅物は左心弁膜:54.3%(50/92)、右心弁膜:21.7%(20/92)、両心弁膜:23.9%(22/92)に形成されていた。腎臓の病理組織学的検索では、間質性腎炎:73.9%(68/92)、点状出血:53.3%(49/92)、梗塞巣:13.0%(12/92)、瘢痕組織:4.3%(4/92)、膿瘍:1.1%(1/92)等を認めた。また、病変がみられなかったものが16.3%(15/92)あったが、このうち73.3%(11/15)は右心弁膜に疣贅物が形成されていた。2. 全ての疣贅物から菌を分離し、このうち5.4%(5/92)で複数の菌が分離され(2菌種:4頭、3菌種:1頭)、分離菌は全部で98株あった。最も多く分離された菌は *Streptococcus suis*:57.1%(56/98)であった。敗血症と診断した豚の多くで間質性腎炎を認めたことから、これらは敗血症に起因する病理所見であると推察されたが、今回の調査で病原菌と腎臓病変における関連性はみられなかった。